

まただわ

とりの

駅に近いアパート

久しぶりに会う友人の家に招待されました。

駅から歩いてすぐという、朝に弱い上に身支度に時間のかかるという友人にぴったりの立地だそうです。

「駅まで迎えに行くから」

そう言われたので、最寄り駅の改札を出た所で待っているのですが。

駅前にはアーケードの商店街が繋がっていて、なかなか活気のあるにぎやかな街です。駅から近いという事は友人の部屋も少しうるさいのかもしれませんが。

とはいえ1人暮らしは初めてだという友人の事ですから、にぎやかな方がうれしいかもしれませんがね。

私も1人暮らしを始めたばかりの時は寂しかったものです。しんとした夜が辛くて、友達や恋人に真夜中急に電話をして嫌がられたりしたものでした。

今はもうその彼氏とは別れてしまったし、しんとした夜の方が落ち着くようになりましたが、ね。

それにしても、やっぱり遅刻です。時計を見ると約束の時間から15分ほど過ぎていました。友人は元々時間にルーズな方なので待たされるのには慣れていますが、知らない街で1人立ちすくんでいるのは心細いものです。学生やサラリーマンが改札に吸いこまれ、吐き出され、それぞれの行くべき所へ向かっていきます。

混雑してきたので近くのカフェにでも入ろうかと周りを見回した時、友人が走ってきたのが見えました。カツカツとヒールを鳴らし、シフォン素材の可愛らしいワンピースを揺らして。

「ごめん、お待たせしました！」

顔色が悪く見えるのは走ってきたせいでしょうか。息が切れて、これだけの事を話すのも大変そうです。

「そんなに待ってないから……。それより顔が白いわ、貧血じゃない？」

大きく深呼吸をして息を整える友人は、前に会った時よりも痩せたようでした。元々細い体がさらにほっそりとしています。ダイエットでもしているのでしょうか。

「最近少し食欲がなくて。ダイエットになってちょうどいいわ」

笑顔を見せた友人にほっとしました。隠しきれない目の下の濃いクマが心配ではありましたが、あまり言うのも悪い気がします。それ以上痩せてどうするの、と、冗談めかしておきました。

歩き始めて分かったのですが、賑やかなのは駅前だけのようです。1本路地を入ると、そこはしんとした住宅地でした。昔からの住宅街らしく、懐かしい感じのする家々と回数の低いアパートが並んでいます。駅から近い民家が多いというのに、歩いているのは私と友人だけ。驚くほど静かな所です。

「静かで良い所ね、駅前とは全然違うからびっくりしちゃったわ」

私の声が大きく聞こえます。それほど辺りが静かなんですね。家の窓からは光が漏れていますが、高齢の方が多いのか声は全く聞こえてきません。小さな子供でもいれば明るい声が聞こえても良いようなものですが、これも少子化の影響でしょうか。

「うん、すごく静かなの。不思議なくらい」

不思議なくらい。私も確かにそう思いました。もっとはっきり言えば、気持ち悪いくらいに静かなのです。

街には気配というものがあります。住宅地であれば、炊事の音や人の出入りが多少なりともあるものです。けれど、ここにはそれらが全く無いのです。

人が住む所に、人の気配が無い。

それは、なんだか、怖い。

「初めての1人暮らしで色々大変じゃない？」

静けさに耐えきれず、友人に話しかけます。ゆらりゆらりと歩く友人は振り向かずに大きく頷きました。

やはり貧血気味なのでしょうか、体の芯が落ち着かないようです。左右にぶれながら歩く友人のヒールの音を聞きながら、そのまま転がってしまうのではないかと心配になりました。

ぴたり、友人が立ち止まりました。

細い彼女がまっすぐに立つと、本当に棒のようです。

「ただわ」

「え？」

ただ、ただわ。そう繰り返しながら、爪を噛みだしました。見ると、人さし指から先は綺麗にネイルを施されているのに、親指だけは何も塗られておらず、いつも噛んでしまうのでしょうか、深爪の上からさらに噛みちぎったようになっています。

初めはきょろきょろと辺りを見回すような仕草でしたが、段々動きが大きくなっていきます。ただわ、ただわ。

上半身を傾くほど大きく左右にひねっています。

ただわ、ただわ。

足を盛大に踏み鳴らすようにしながらその場で円を描くように回り始めます。

ただわ、ただわ。

噛み続ける親指の爪から鮮血が散り始めました。

ただわただわただわただわただわただわただわただわただわただわただわ

恐ろしいほどの速さで、小声なのに響く声が辺りにばら撒かれます。

突然始まった奇妙な舞踊に、私は硬直してしまいました。可愛らしいシフォンのワンピースが体にまとわりついて、ヒールは絶え間なく音を立てています。

蒼白の顔に赤い血が飛び散り、巻かれた髪がばさっ、ばさっ頬を打ちすえます。

ただ、やはり美味しい話には裏があるものなのだと、寒気と共に納得したのです。

私はもう二度と、あの駅で降りる事は無いでしょう。絶対に。